

テニアン・サンホセ地区に残る日本委任統治時代の建築物（1） —戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究— その7—

9. 建築歴史・意匠—2. 日本近代建築史
南洋群島 南洋興発 社宅
事務所 実測調査 保存

正会員 ○ 辻原万規彦^{*1} 同 今村仁美^{*2}
同 香川治美^{*3}

1. はじめに

本報は、北マリアナ諸島サイパン島チャランカノア地区における日本委任統治時代の建築物の残存状況などを報告した前報¹⁾に引き続き、北マリアナ諸島テニアン島サンホセ地区における日本委任統治時代の建築物の残存状況を報告すると共に、そのうちの幾つかの実測調査の結果を報告することを目的とする。

これらの建築物の調査は、まず現存する建築物をできる限り詳細に記録することを念頭に置き、次いでそれらの建築物の位置付けや評価を行い、最終的には可能であれば保存を提案しようとするためのものである。

なお本報では、当時の用語、呼称をそのまま用いた。

2. テニアン・サンホセ地区に残る日本委任統治時代の建築物

日本が南洋群島を委任統治するために1922（大正11）年に設置した南洋庁には、地方行政のために、北マリアナ諸島を管轄するサイパン支庁ほか5つの支庁が設けられていた。その後、1933（昭和8）年5月には、テニアン・サンホセ地区にサイパン支庁テニアン出張所が置かれ、支庁事務を分掌した²⁾。

南洋群島で最大の企業であった南洋興発株式会社は、まずサイパン島に製糖工場を建設して製糖事業を開始した。その後、1930（昭和5）年1月にはテニアンに建設した工場（第一工場）も操業を開始し、1934（昭和9）年12月には第二工場も竣工した³⁾。その結果、テニアンは、南洋興発の企業城下町の感を呈し、にぎわった。

図1は、1983年現在⁴⁾と2000年現在⁵⁾の地図を基に、琉球大学南洋群島研究会と沖縄県文化振興会史料編集室らが作成した戦前期の復元地図⁶⁾、日本委任統治時代の街並みなどが写された数多くの写真、ならびに2001年7月と2002年4月に行った現地調査結果などから作成した。ただし、地図は未だ完全なものではなく、地図

に挙げたもののほかにも、数多くの建築物などが残っていると考えられる。

3. 南洋興発のテニアン工場事務所と糖度分析所

図2に、旧南洋興発テニアン製糖所工場事務所の現況平面図、立面図ならびに現況写真を示す。また図3に、旧南洋興発テニアン製糖所糖度分析所の現況平面図と立面図を示す。

図2では図が小さいため見にくいだが、他の部分に装飾がほとんどないにも関わらず、工場事務所の玄関の底のみには装飾が取り付けられているのが特徴的である。また糖度分析所でも、2階の張り出し部分のB立面側に、パイナップルをモチーフとした装飾が施されているのが特徴的である。なお、両者とも内部がどのように使用されていたのかについては、現在のところ不明である。

糖度分析所は、アジア・太平洋資料室所蔵の写真集⁷⁾の中で「テニアン第二工場敷地均し中 昭和8年6」と説明書きのある写真に工事中の様子が写っている。また、「テニアン製糖工場構内（東側）昭和9-12月」と説明書きのある写真では、完成している。さらに、別の写真集⁷⁾に掲載の写真では完成した様子が写っているが、この写真は、第二工場の煙突が写し込まれていないことから1934（昭和9）年12月以前で、かつ甘蔗が運び込まれていることから製糖期（通常は1月頃から7月頃）の撮影であることがわかる。したがって、糖度分析所は1933（昭和8）年6月頃に着工し、遅くとも1934（昭和9）年7月頃までには完成したと考えられる。なお、設計者についての資料は現在のところ未見であり、今後の検討課題である。

工場事務所については、前述の「テニアン製糖工場構内（東側）昭和9-12月」と説明書きのある写真には写り込んでいないことから、1934（昭和9）年12月以降の建設と考えられる^{注2)}。また、糖度分析所と同様

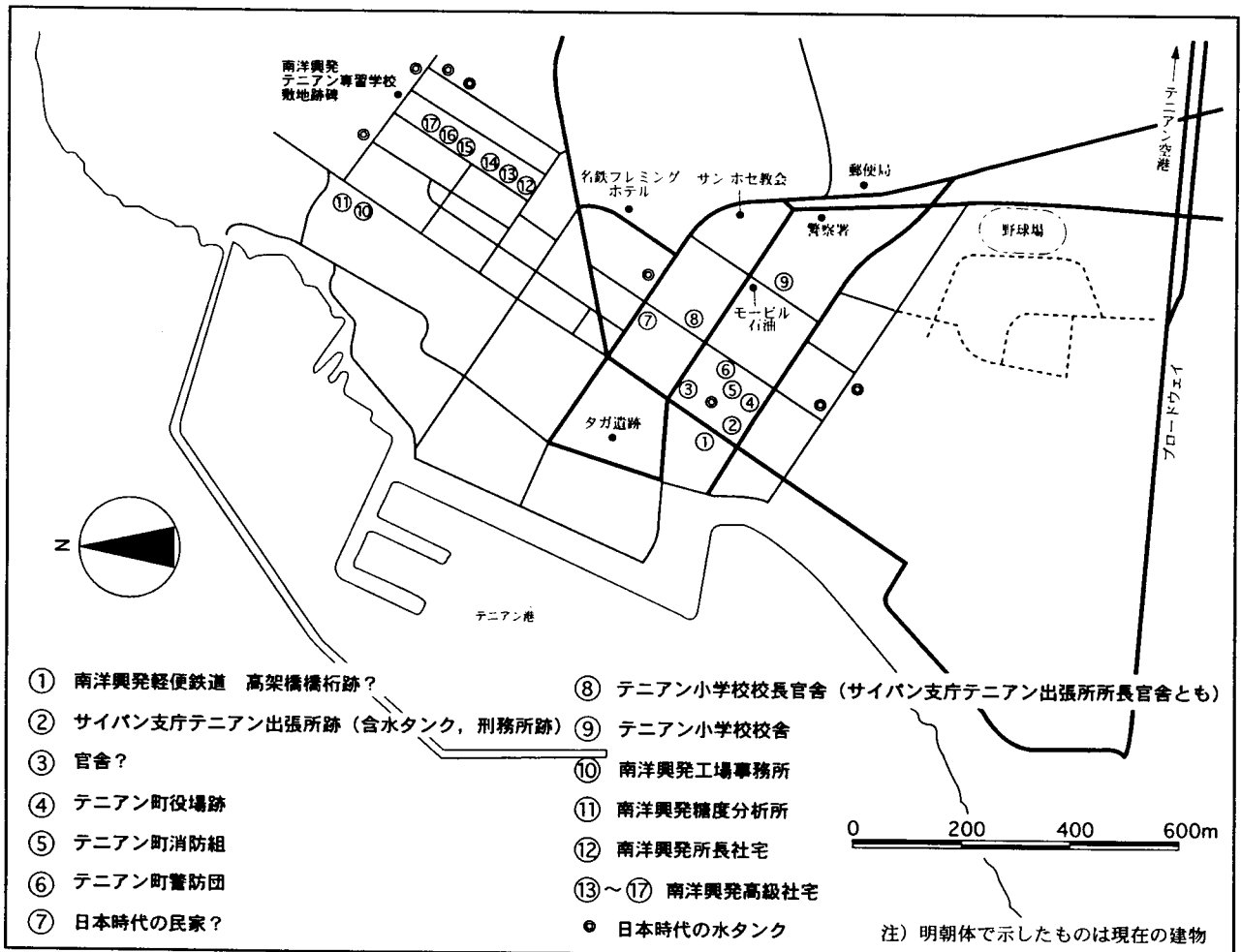


図1 テニアン・サンホセに残る日本委任統治時代の建築物

に設計者についての資料は現在のところ未見であり、今後の検討課題である。

4. テニアン町消防組と警防団

図4に、旧テニアン町消防組の建物の現況平面図と立面図を示す。また図5に、旧テニアン町警防団の建物の現況平面図と立面図を示す。

製糖工場の操業などに伴い人口が増えたために、ソンソン地区を中心として「テニアン町」が設置されたのは、1932（昭和7）年9月である⁸⁾ので、両者の建物はこれ以降に建設されたと考えられる。

しかし、両者が写された当時の写真や建設の事情に関する資料は現在のところ未見であるため、当時の室内の様子や使われ方は全く不明であり、今後の検討課題である。

5. まとめ

本報では、主として現地調査の結果を基に、北マリアナ諸島テニアン島サンホセ地区における日本委任統治時代の建築物の残存状況を報告し、幾つかの建築物の実測結果を示した。残存状況を示す地図には不十分な点が多く、南洋興発の社宅群については、検討すべき課題が数多く残っている。今後、さらに研究を進める必要がある。

謝辞：現地調査では、北マリアナ諸島政府社会文化省歴史保存局副歴史保存官のLon Bulgrin氏、テニアン駐在のCarmen A. Sanchez氏ほかスタッフの皆様にご協力頂いた。資料収集ではアジア・太平洋資料室の山口洋児室長に、情報収集では太平洋学会の中島洋専務理事にご助力頂いた。なお本報の一部は、平成13～14年度科学研究費補助金（奨励研究（A）、若手研究（B）、課題番号13750557）と平成13年

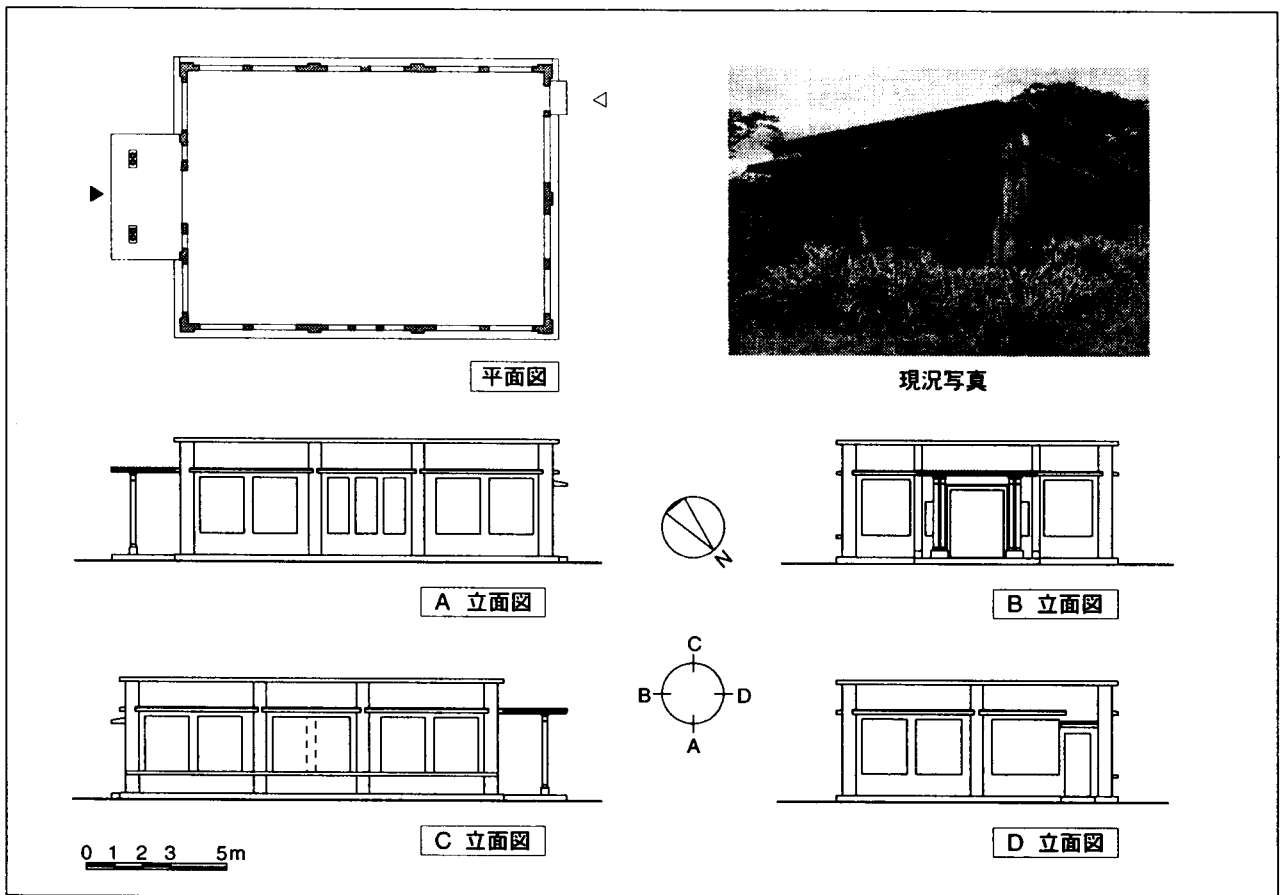


図2 旧南洋興発テニアン製糖所工場事務所の現況平面図，立面図ならびに写真

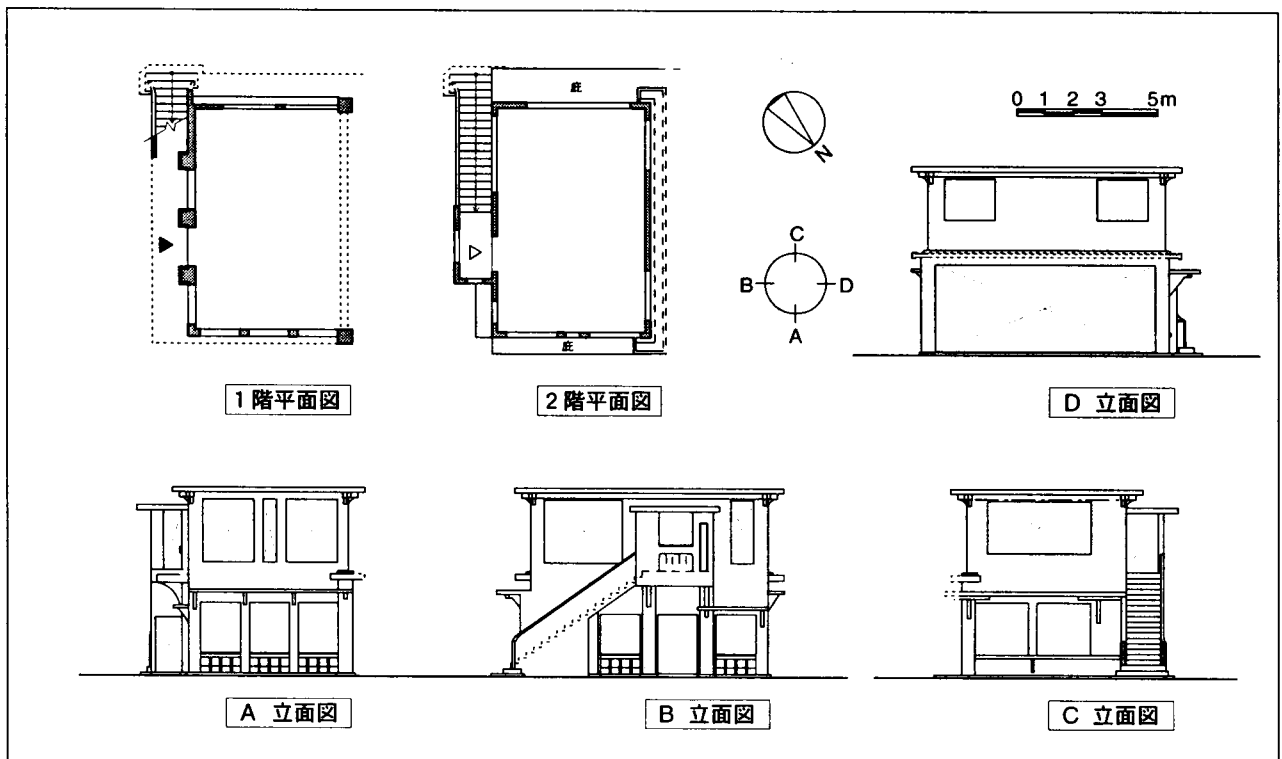


図3 旧南洋興発テニアン製糖所工場糖度分析所の現況平面図と立面図

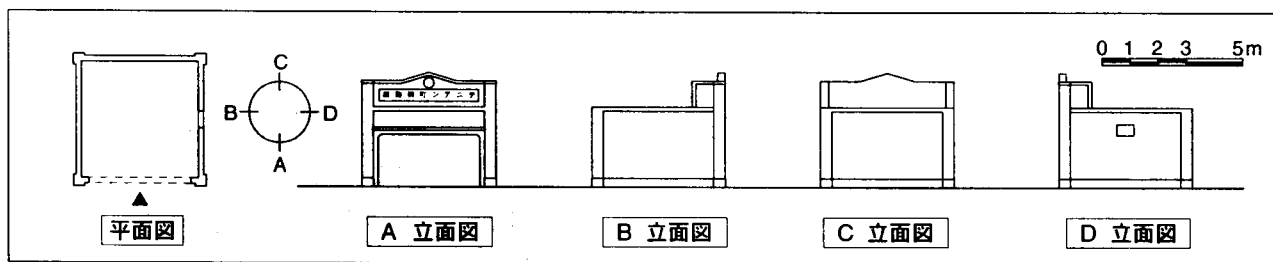


図4 旧テナン町消防組の現況平面図と立面図

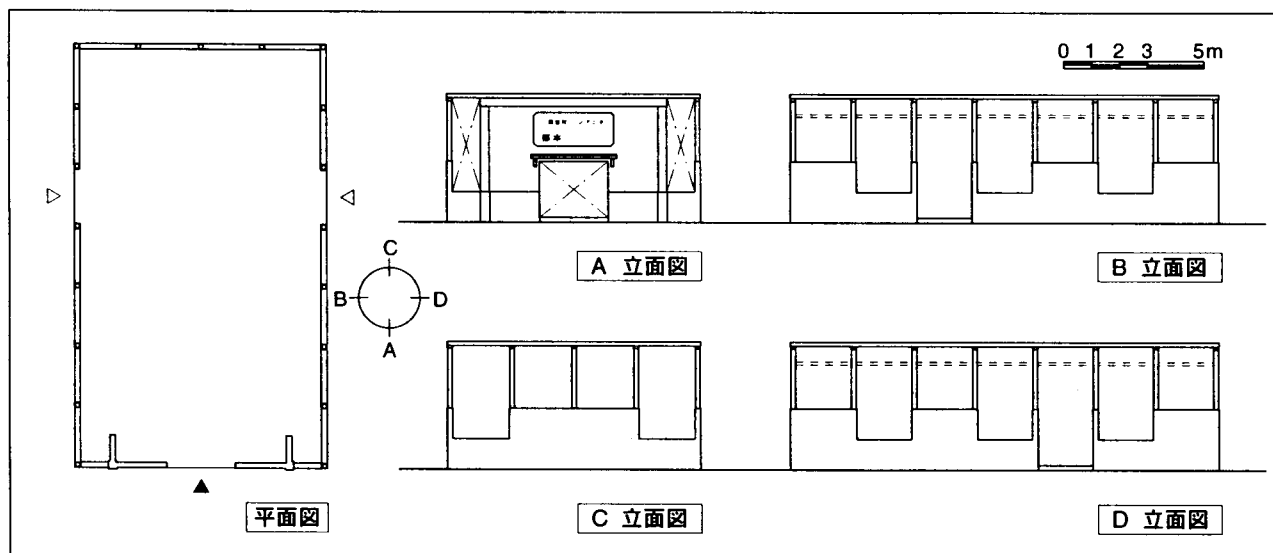


図5 旧テナン町警防団の現況平面図と立面図

度(第39回)三島海雲記念財団学術奨励金によった。記して謝意を表す。

<脚注>

注1) 「サイパン・テナン・ロタ開発写真帖 南洋興発株式会社」と題された写真集ではあるが、実際には個人アルバムを複製したものであり、出版されているわけではない。説明書きについては、アルバム所蔵者によると考えられるが、記述が詳細であり、その内容に対する信頼性も高いと考えられる。

注2) 当然、写真集6)の写真にも写り込んではいない。

<参考文献>

- 1) 戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その6, 建築学会関東支部研究報告集, 第72号, 投稿中, 2003.3
- 2) 外務省条約局法規課: 外地法制誌第五部 委任統治領南洋群島 前編, 外務省条約局法規課, pp.202~215, 1962.12
- 3) 武村次郎: 南興史(南洋興発株式会社興亡の記録), 南興会,

pp.78~82, 1984.5

- 4) United States Geological Survey: Topographic Map of the Island of Tinian, United States Geological Survey, 1983
- 5) Kate Galbraith, Glenda Bendure, Ned Friary: lonely planet Micronesia 4th edition, Lonely Planet Publication, 2000
- 6) 沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編: 沖縄県史ビジュアル版9 近代② 旧南洋群島と沖縄県人-テナン-, 沖縄県教育委員会, pp.8~13, 2002.2
- 7) アサヒ写真館撮影: 我等が海の生命線 南洋写真帳 サイパン島・テナン島・ロタ島之巻, 南洋舎, 発行年月不明
- 8) 大蔵省管理局編: 日本人の海外活動に関する歴史的調査 通巻第二十冊 南洋群島篇 第一分冊 第一部総論, 高麗書林, pp.66~69, 1985.6

*1 熊本県立大学環境共生学部居住環境学専攻 講師・博士(工学)

*2 アトリエ イマージュ

*3 熊本県立大学環境共生学部居住環境学専攻 助手・博士(工学)